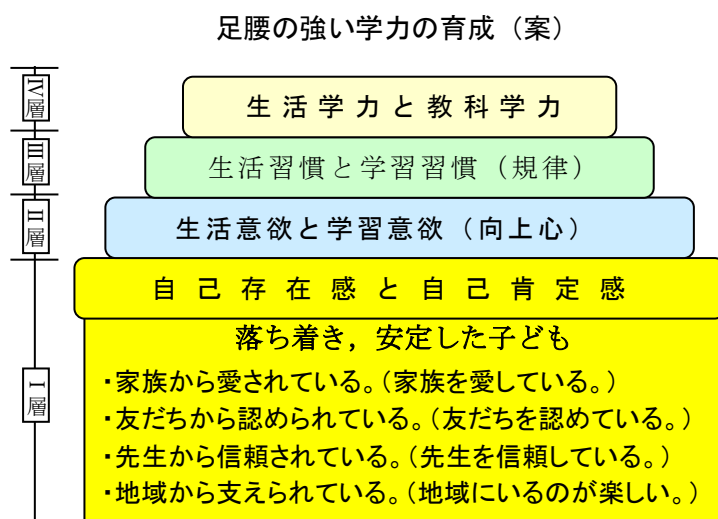


今年3月、小・中学校学習指導要領の一部改訂がなされ、7月には「小・中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」、いわゆる道徳科の解説書も公表された。次期学習指導要領の改訂への具体的な動きが出ている。今の段階では詳細は分からないが、これからの社会の変化や動向のとらえ方で、未来社会で活躍する子供たちに身に付けさせたい能力や態度などは変わるだろう。その根底には、時代や社会がいくら変わっても変わらないものがあるという基礎基本論や不易と流行の考え方はいつもある。当然のことであろう。むしろ、時代の流れや変化への急速感と不透明感が強ければ強いほど、「待てよ。」という気持ちは湧き起こるし、不安にもなる。迷いも出る。

我々教員は、確かに変化には目が向きやすいし、乗り遅れまいと努力はする。今一度、このような外の変化ではなく、子供の内なる心根を見つめ直して、これからの学力を考えてみたい。

全国学力調査の実施時期と結果公表時には、一般社会のニュースにもなり、順位がさらに興味をもたせる。現場は、この順位や正答率で一喜一憂することになり、更なる上位を目指した具体的な学力向上対策が求められる。この数年来、同様な動きの中で、教師自身の職務に対するモチベーションは上がってきているのか、聞いてみたい。

昨年度の小学校児童の不登校が増えてきているという数字もある。今後も、子どもものの負の部分が思わない形で露呈されることが予想される。しかし、少々のことでは迷わない教育観の中で、足腰の強い骨太な「学力」を身に付けたいものだ。その



ためには、左図のⅠ層にある子どもが落ち着き安定した環境を学校や保護者、地域でつくることが重要である。それは、将来にわたって様々な資質や能力を身に付けたり発揮したりする際の基本領域になるからである。

このような環境であれば、Ⅱ層にある生活や学習への向上意欲はもちやす

い。そして、意欲を喚起させれば、Ⅲ層の生活や学習への良好な習慣化は行い易いと考え。教科と生活をつなぐ学習を通して、Ⅳ層の教科の学力と生活の学力がともに、「使える学力」（求めたい学力）として昇華され则认为る。

学校に行きたくても行けない子供の中には、対同級や対担任(担当)の間で悩み苦しむ、家族間の大きな苦しみにも発展している事案もある。不登校児童生徒と接してみても、対処法では解決の限界を感じる。生を受けた瞬間からⅠ層を大切にしたい子育てをしなければ、厳しい園児や児童・生徒は増える则认为る。(芝)